

# 日本をキリストへ 協力

「日本をキリストへ」  
伝道団体連絡協議会

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1

TEL 03-3296-1001

## 宣教のヴィジョンに生きる

伝道団体連絡協議会副会長 原 登

使徒パウロは、迫害のために捕らえられてアグリッパ王の前に立たされ時、大胆に証して「アグリッパ王よ、わたしは天よりの啓示にそむかず」（使途二六・一九、二〇）と言いました。迫害や様々な困難をもとせせず、大胆に宣教のヴィジョンに生きていきました。

神が聖霊によって人間に示される宣教のヴィジョンは多様であります。そこから宣教の働きにおける様々な方法が生まれました。ただしどの様な宣教の仕方であれ、その目的は一つであります。すなわち救霊の働きであり、そして教会形成に結びつくものでなければなりません。人の世が複雑になるにつれ、救霊の方法論も多様性を帯びてまいりました。ただしどの様な方法であれ、その一つだけをもって全部とすべきではなく、様々な方法を通して福音のみ業は前進していくべきものであります。

私は伝道団体連絡協議会の発足以来、委員のはしくれとして関わりをもってまいりました。フェスティバルやその他の機会を通して伝道団体の方々とお交わりをする中で、改めて伝道の多様性に目が開かれると同時に各種の分野でよい働きをされている団体の様子を拝見し、敬意を表してまいりました。伝道団体の方々との相互の交わりと助け合いの中で、私

は次の様に考えます。

一 各伝道団体は、成長していく中で、企業化（？）することを警戒しなければなりません。伝道団体は教会から生まれ、また教会に仕えていくものである事を認識し、その姿勢を崩してはならないということがあります。教会を利用するのでなく、教会に利用されやすい伝道団体でなければなりません。教会に仕えていくものであるべきであります。具体的に、牧師に喜ばれ牧師に感謝される様な伝道団体、教会形成に役立つものでなければなりません。

二 各伝道団体は独自に活動が展開されていますが、それが相互に連係もち、助け合ってゆくものでなければなりません。そのために今までフェスティバルや一泊修養会などを行ってきたが常設的な連係を保って推進してゆくことが必要でないか。言い換えれば各団体がそれぞれ団体独自に展開されている働きをもっと有機的に、血の通ったものとする様に交通整理をする必要はないだろうか。自由企業（？）的を在り方から脱皮できないものだろうか、ということでもあります。

日本の宣教のために、教会形成に大きく奉仕する団体となるために、常設的な連絡機関が必要ではないか。伝道団体そのものが宣教のヴィジョンに生きてゆくために、と考えます。

# いのちの水・計画

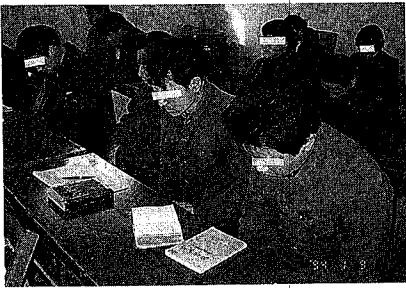
〈事務所〉〒163-91 東京都新宿郵便局私書箱303号  
☎03-3341-7431

FAX03-3341-7432

中国宣教団体として一九八二年五月に発足しました。一九四九年、共産主義国家として以来、中華人民共和国が誕生しその無神論政策により、海外宣教師は国外退去となり、その宣教活動の門戸は閉ざされました。以後、四十年に渡り中国の教会の状況は竹のカーテンのあなたに消えて行きました。

しかし、後に分かったことは、この苦難と迫害の時代に中国の教会は成長をとげ、一九九二年の統計局の発表では、七千五百万人のクリスチャン（うちプロテスタント六千二百万人）が認められています。今世紀最大の教会成長は、共産国の中国にあつたことがわかります。

「いのちの水・計画」は、中国の教会における聖書の欠乏を知った日本の教職・信徒有志が、宣教の可能性を求めて祈り、実行委員会（奥山実委員長）を発足させ活動を開始しました。特に、政府の管理下にならない家の教会のクリスチャンのために中国語聖書を届ける働きが始まりました。現在まで約五十三万冊の聖書が中国各地の家の教会に届けられています。現地（特にクリスチャンの八十%が住む農村地帯）



からの聖書を希望する声は年々高まっています。また中国各地で開かれている家の教会の伝道者訓練学校（写真）を援助する働きも一九九〇年から始まっています。

この働きを推進するために日本の協力教会の援助、背後の祈りは拡大しており、全国三十か所定期的な支援祈禱会が開かれています。

# ホザナ・ミュージック株式会社

〈事務所〉〒359 埼玉県所沢市緑町4-9-4

☎0429-22-6220

FAX0429-25-3580

一九六九年、織田恭博を中心に設立した音楽伝道グループ、ザ・メッセンジャーズはメンバー、スタッフそれぞれが教会から遣わされ、集められ、日本各地の教会を始め、附属幼稚園、ミッション・スクール、合同伝道集會等において賛美と証しのご奉仕を通してキリストの福音を伝えてきた。特定の団体に属さず超教派の働きとして活動が広がるにつれ、個人や教会からの支援だけでは限度を感じ、幅広い経済的基盤を得るために一九八二年会社を設立するにいたった。

マタイ二二章九節の英語読みから名前を付けたこの会社は、

①音楽伝道グループ、ザ・メッセンジャーズのマネージメント。②クリスチャン・ミュージックCD、ビデオ商品等の制作、輸入を行い、キリスト教書店や直接販売を通じて取扱をしている。現在三名がザ・メッセンジャーズのメンバーとして献身し、スタッフ四名がそれを支えている。また、創立者の織田恭博は一九八九年よりアメリカ留学し神学校で学び、現在日系人福音宣教協力会の日語部副主事として、アメリカと日本を結びながら活動している。



教会の礼拝や定期集會、また伝道集會においてもっと賛美が生かされることによつて、クリスチャンには神に愛され赦さないうる者としての恵みを、ノンクリスチャンには救い主なるイエス・キリストとの出会いを経験していただきたく願っている。音楽商品の販売と共にこの伝道のためにお祈りください。

# パラビジョン

〈事務所〉〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1 OCC内

☎03-3294-9095

FAX03-3294-9305

パラビジョンは、一九八三年十月三十一日（宗教改革記念日）に働きを開始しました。当時、ニューメディアといわれ、ようやく普及しはじめたビデオを、「宣教媒体として教会に提供する」というビジョンは、この十年の歩みの中で、その働きをさらに拡大されました。現在の主な働きは、宣教ソフト（ビデオ・カセット・CD）の制作、放送番組の制作（教会や伝道団体との提携）、ビデオ・録音スタジオの運営、諸集会の音響・中継・録音録画・同時通訳等の技術サポート、礼拝堂や諸施設の音響・ビデオ設備の設計施工、OHP・映写幕の販売などです。更に、最近では建築音響へのコンサルタン業務も加わりました。また、教会文書の作成に欠かせないコピー機・印刷機の販売、スピード印刷やカラーコピーも皆様に大変重宝されているなど、設立当初は予想もしなかった働きもあります。それらは、十年の歩みの中で出会い御指導くださった先生方、信徒の方々とその教会・団体のニーズにお

応えしようとする中から導かれた働きです。

近年の技術の進歩は驚くべきものですが、ハイテクが物質的繁栄をもたらすとしても、そこには「救い」はありません。「救い」は教会の宣教にゆだねられています。ことに価値観の多様化している現代においては、よりハイタッチな宣教方策が必要とされています。私たちパラビジョンは福音的クリスチャンの技術者集団として、教会のハイタッチな宣教の業に、ハイテク技術でお仕えいたします。



# いのちのこぼれ社

〈本社〉〒160 東京都新宿区信濃町6

☎03-3353-9345（代表）

FAX03-3359-6126

いのちのこぼれ社は、一九五〇年十月に「いのちのこぼれをしっかりと握って、彼らの間で世の光として輝かためです」のみことから社名を与えられて創立し、福音的聖書信仰／超教派的立場／伝道のビジョン／神のみこころに従順である、という四つの基準によって活動を開始しました。

当初から、聖書の大宣教命令「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい」を成就するために、文書を通して聖書の教えを深く広く知らせることを目的として、現在までに入門書から専門的な注解書までと幅広く、この四十四年間で千四百点におよぶ書籍を出版しています。また月刊「百万人の福音」週刊「クリスチャン新聞」、CS教案誌「成長」の発行、新改訳聖書の出版、またビデオ・CD・カセット・トラクト、各種イベントの開催するなど時代のニーズにあったものを企画・制作・販売しています。

また全国に二十店舗のライフセンター書店を持ち、当社の全出版物、洋書、ビデオ・CD、教会用品を直接お客さまにお届けしています。

当社ではこの二月、創業会長として長きに渡り当社の責任を取ってきたケネス・マクビーティ会長が名誉会長に退き、副会長の多胡元喜が会長に就任しました。ますます主と教会の方々に喜ばれ、役立つものとさせていただきたいと願っています。特に、指導者の交代という大きな節目に当たるこの一年のためにお祈りください。



# 地域教会と超教派伝道団体

②

## 「パラチャーチ考」から

キリスト者学生会総主事 片岡 伸光

### 地域教会と伝道団体

私自身は、小学校二年生の時に初めて教会に導かれ、高校生の時受洗し、以来一教会員として歩んできました。そのことは、私の信仰生活の基本であり、土台です。主は、キリストを信じ救われた者が、特定の地域教会の一員として、信仰を同じくする群れに属することを望んでおられます。これは、伝道団体協議会に属するすべての団体の確信であると信じています。

大学を卒業してから、キリストに召されて、現在のキリスト者学生会の主事に奉職し今日にいたっています。そのときから、一地域教会員でありながら、学生伝道の働きを通じて、多くの地域教会に仕えるものとされました。奉仕の当初から、教会とよい関係を築くことの重要性を先輩から教えられ、出来るかぎりこれに努めてきました。教会を訪問して、働きについて知っていたかどうかというのですが、若いかけだしの時には、緊張せざるをえないとためでした。今思うに、単に若いというだけではなく、働きそのものや、それに従事する私自身が知られていないことから来る緊張があったように思います。

超教派伝道団体は、一地方教会に仕えるのではなく、その与えられた使命を通して、多くの地域教会に仕えるものです。多くの教会に仕えるとはいえ、超教派の伝道団体の働きは、教会が会議を開催して、次はこれこれの働きが必要なのでこの働きを開始しようと決議して始まったものではありません。ですから、伝道団体に属するものは諸教会に仕えるつもりで働いていても、地域教会からみると派遣した覚えはないということになることもあります。伝道団体は個人に示された幻に基づいて始められることが多く、特定の領域で効果的に短い時間に事が進み、地域教会がその働きを理解する間もなかったりします。理解がないまま働きが進められるために、両者の間に緊張が生まれるのです。

今日の状況で、伝道団体が、あらゆる地域教会の認知を得てから働きを開始することは、不可能でしょう。しかし、だからといって伝道団体は、福音の鍵を委ねられている地域教会を無視したり、飛び越えたりしては、結局自らの存在基盤を失うことになるでしょう。

### 求められる姿勢

そのような中で、超教派の働きにあずかるものは、出来るかぎり関係する地域教会に、連絡を取り、働きについて報告をする責任があります。自分たちの働きがよって立つところの聖書の基盤、信仰的土台に始まり、活動の内容や現在の状況が明確に知られる必要があります。理解は知られるところから、得られ始めます。伝道団体が理解されにくい理由の一つは、この地域教会に対する責任意識が希薄であるとの印象を与えてしまうことによりです。

この場合、地域教会が超教派の伝道団体の働きを理解するのは、一般に超教派のものが考える以上に時間がかかることを知っておく必要があります。地域教会は、限定された地域で、あらゆる人を対象にした活動をするのに対して、伝道団体は目的に従い効率を追求した働きをしており、時間感覚が早いのです。また、地域教会は誤れる教えから群れを守る責任があり、新しい働きには慎重にのぞむからです。

他方、地域教会は、超教派伝道団体の働きが、その教会によって始められたものではなくても、主がその働きを開始され、聖霊が導いておられると判断したものについては、これを認知する必要がありす。 つづく

発行日 一九九四年三月十五日  
発行者 本田弘慈  
編集者 鈴木繁